

特集Ⅰ 出産

# 出産革命を通して人類の未来が見えてくる

橋爪大三郎



## 1 序…無出産社会へ

「1」人間は、人間から生まれるしかない。これが長いあいだ、人類の宿命だった。その宿命の例外に対する信仰(たとえばキリスト教)もまま見られないこともないが、それは、この宿命がどれほど深く人びとをとらえているかという事実を、逆照射するものにほかならなかった。

けれども、この宿命は、人間が人間であること、必然的な条件なのだろうか？

それは、「人間から人間が生まれる」という言葉の、解釈しだいであろう。これを「出産」という意味に、すなわち、「人間が新生児を胎内に孕んで、そののちに、分娩する」という意味に解釈するならば、それが必然でも何でもないことは、明らかだ。生命科学や生殖

技術の発展が、そういう「必然」から人間を解放してくれる日が、ほんのすぐそこまで迫っている。

出産(伝統的な人間誕生の方法)が、必然でなくなれば、それは選択の対象になる。そういう方法で子供をもうけてもいいし、別の方法でもうけてもいい。

こういう選択を、人生のオプションに織りこんだ社会を、「無出産社会」と言おう。妊娠→出産は、危険であり、わずらわしくもある。ゆえに、いったんそれが選択できるようになれば、大部分の人びとが出産を避けて通るようになる(ごく一部の人が、趣味や主義の問題として、伝統的なやり方で出産するだけになる)だろう、と思われるからだ。

この論考では、出産革命がどうやったら可能になるかという、技術的な問題には立ち入らない。とにかくいざ、そういう社会がやってくる。そのような変化が社会的に受容されるための条件や、それが逆に社会に与える影響、等々といったことをもつぱら考察して

みよう。

## 2 アニマル子宮

「2」「結婚適齢期」より「出産適齢期」こそが問題だ！——文藝春秋社の女性誌「クレア」の、最近号(九〇年五月)の「結婚特集」のタイトルにこうあったけれども、その通りなのだ。

女性の社会進出は、七〇年代、八〇年代を通じて着実に進んできた。これは必然的で不可逆のプロセスだし、結構なことである。

別の角度から眺めると、これは女性たちが、人生の選択性を増大させている、ということでもある。従来は、まるで当たり前のように身に降りかかっていた(そうでなくてもよかった)それが、じつは選択の対象だった(そうでなくてもよかった)。それなら立ち止まって、これでいいのか考えなおそう。結婚も、出産も、そうやって、宿命ではなく、数あるオプションのひとつになった。

これはという伴侶と人生を共にするのが結婚の目的なら、「適齢期」だからなどと焦るのは邪道である。理想の相手とめぐり逢ったときこそ、適齢期ではないか。たとえば、二〇代後半までが適齢期、などと期限を切ったりすれば、自分で自分の選択性を狭める結果になり、愚かなことだ。

結婚は、それで済む。ところが出産のほうは、すこし事情が違う。年齢という生理的な条件を、無視できないからである。高年齢の出産(特に初産)は危険だから、四〇歳、できれば三五歳までに、子供

を産みましよう。などと言われると、自分の歳を指折り数え、そろそろ年貢の収めどきかもしれないと、決断を迫られる。

「3」恋愛→結婚→出産、というステップを、ノーマルなものを受け取ってしまうと、出産可能年齢の壁が、大きく女性のまえにたちだかってくる。

たまたま順調にこのステップをたどった女性は、それに気づかないかもしれない。しかし、出産にタイム・リミットがあつて、しかもそれが人生の中間点よりも早い時期(三〇代?)ということになれば、人生設計はどうしたって、ぜんぶ前倒しになっていく。出産から逆算して、この年頃には結婚しなければならず、そこからまた逆算して、この時分には恋愛せねばならず……。恋愛は、もつとも自由でもつとも選択的な人間関係のはずだった。それなのに、こんな背水の陣、大慌てで相手を見つけないならならぬなんて、なんという矛盾だろう。

この矛盾を解消するには、さつきみたいなステップをノーマルなものを受け取らなければいい。恋愛なんかに関係なく、結婚する(恋愛はあとから、ゆつくりしよう)。あるいは、結婚していなくても、出産する(未婚の母)。そこまで覚悟を決めると、出産年齢の壁で何から何までがんじがらめにならなくてもすむ。——のは確かだけれども、なんと犠牲の大きいことだろう。誰もが未婚の母になるわけにもいかないだろうし、ノーマルなステップを踏む大部分の女性はこうしてくれらる。

「4」だからこそ、出産の年齢的ナリミットをとり払うことができれば、数え切れない女性たちにとって福音になるだろう。いくつにな

つても子供をもうけることができる。そのチャンスが保証されれば、女性だって、少なくとも現在の男性並みに、人生設計の自由を手に行けるはずだ。

現在の医療技術でも、そのことは、まったく不可能というわけではない。卵の冷凍保存+代理母、の組合せで、自分では出産できない年齢(五〇〜六〇歳くらい)の女性でも、自分の子供をもつことが可能ではある。

今のところ、卵の冷凍保存可能期間は、二十年たらずと言う。それでも「出産適齢期」は、大幅に延長できる。三〇代のなかばぐらいまでに、卵を摘出・冷凍保存しておけばよいのだ。それがいつでも解凍できるとわかっているならば、年齢の壁はかなり取り除かれたことになるだろう。

【5】ただしこのやり方を、誰でも利用するというわけにはいかない。技術がまだ未完成であるとか、成功率が低いとか、倫理的な問題が残っているとかいう意味ではなくて、代理母のなり手が見つからないからである。代理母(提供者の卵を妊娠する別の女性)に代わって出産してもらおうというやり方では、この限界に突きあたると。

代理母となる女性は、卵を提供して子供をもうけたい(と少なくとも潜在的に思っている)女性に比べれば、ぐんと少数であるだろう。もしも彼女らになんの対価も支払われなければ、代理母になりたいとなりの女性には、極めて少ないはずだ。妊娠の期間(の相当部分)を安静に(働かないで)過ごすだけの余裕(財力と時間)があり、しかもよるこんで(無償で)、他人の子供を出産しようなんていう若くて健康な女性が、はたして何人見つかるだろう。

その技術を、のこりの大部分の女性たち——産もうと思えば自分でも子供が産める女性たちも利用しようと思うかどうかは、彼女たち自身の問題である。いずれにせよ、女性の選択の自由は増える。私にはそれを、とどめたり禁止したりする理由が見当たらない。

【7】人間の受精卵を、体外で発生させ、赤ん坊の段階にまで大きくしてしまふ技術を、ふつう「人工子宮」とよんでいる。こんな技術が完成しているわけではないが、人びとがイメージしているのは、試験管やフラスコ、培養液のチューブなどが組み合わさった怪しげな実験装置である。

なぜなのかわからないが、人間の卵は、体外に取り出し人工的な環境下に置かれると、すぐ死んでしまうらしい。人間の胎盤に代わる人工胎盤を作り出そうという試みもなされているが、結果は思わしくない。この調子では人工子宮など、いつ出来ることやらさっぱりわからない。

ここからは、私の素人考えだが、わざわざフラスコや培養液で「人工」子宮を作ってみたりするより、もっと人間のからだに似たものを利用するほうが賢明なのではないか。高等哺乳類の子宮をそのまま利用して、人間を産ませることを考えたほうがいい。飼いやすさや子宮の大きさから考えて、ブタなんかどうだろう。

母体(ブタ)と新生児の蛋白組成は違うから、抗原抗体反応が起こるだろう。だから免疫をコントロールする技術が、まず必要だ。そのほか、いろんな基礎研究を、いちから始めないといけない(こういう研究をどこかでしていると、聞いていない)。手はじめに、イヌの卵をブタの子宮に移植したり、モルモットの卵をネズミに移植したりす

代理母に対価(報酬)を支払うことにすれば、なり手はもう少し見つけやすい。それでも、倫理的な非難(そんな非道徳なことをしていいのか)や心理的苦痛(自分がお腹をいためた子の母になれない)を考慮すると、全出生数の数パーセントをカヴァーするのもむずかしいだろう。

もっとも合理的な解決は、代理出産クーポン券みたいな制度を工夫することである。出産年齢の壁に縛られたくない女性は、若いあいだに、誰かの代わりに子供を産んでおき、とりあえずクーポン券を確保。あとでそれを使って、こんどは自分の子供を誰かに産んでもらう。こういうやり方なら、代理出産の割合をうんと増やすことができる。女性の相互扶助ということ、道義的な正当化もできる。ただし、出産は相変わらず、女性にとって少なからぬ負担のままだろう。

【6】なんて言うたちまち、出産を「負担」と考えるのが間違いだ。出産こそ女性の、いや人間の貴重な体験なのだ。そう言って、反論されそう。

気持はわかるが、特に高齢の女性の場合、それはあきらかに「負担」であるし、危険でもあるではないか。職業を持っていたり、健康に問題があったりすれば、妊娠・出産をためらう女性だってやばり多いだろう。それに、卵管の閉塞などいろいろな原因で、妊娠の無理な女性だって大勢いる。

だから、自分で妊娠・出産できなくても、自分の子供を持ちたいと思っている女性は少なくない。そして、その女性たちのために、代理母に代わって子供をもうける技術を完成させるのはよいことだ。

実験(倫理的な問題が全然ない)を、じゃんじゃんやるべきだろう。こういう技術的な問題が解決して、人間以外の動物の子宮が人間の出産に使えるようになれば、おそらくそれは伝統的な出産よりもずっと安全で有利なものになるだろう。着床から出産にいたるプロセスがあらかた解明されたのであれば、妊娠の全期間を完璧に医学的な監視のもとにおくことができるし、遺伝子治療や胎児手術などもずっとやりやすくなる。

かりにブタの子宮が利用できたとする。ブタは、代理母とちがつて、いくらでも見つかるし、生まれた子供の引渡しを拒んで裁判に訴えたりする心配もない。費用もそれほどかからないだろう。ゆえに卵の冷凍保存+「アニマル子宮」技術が、もっとも現実的な解決策だと思ふ。

【8】三十年後になるか、それとも五十年後になるのか、わからない。この、人工子宮ならぬアニマル子宮が実用化されたとして、女性のライフコースや家族形態は、どんな変化をみせるだろうか。

第一に、この技術が利用できることになることの直接的な効果として、三〇代女性の「かけこみ出産」がなくなるだろう。あとで後悔すると嫌だから、この際子供を産んでおこう(この際相手を見つけておこう)みたいな、見切り発車の出産(結婚)は、必要なくなる。(ちよつと面倒だが)卵を冷凍保存しておくだけでいいからだ。

ではその卵は、十年後、二十年後に誕生するかというと、女性たちはいちおうそれで気がすんで、結局子供をもうけない、ということになりそう。もちろん、待望の子供が持てるようになって喜ぶ不妊の妻もいるし、大きいおなかをしなくていいなら薬だから子供

をもうひとり、という夫婦もいるわけで、その分の出生増も見込まれるが、それを帳消しにするぐらい、女性が子供をもうけない傾向が進んでいるはずだ。要するに、この技術の効果としては、出生数のかなりの減少が見込まれるだろう。

第二に、「産む性」としての女性が、「中性化」される。女性が減りに妊娠しなくなると、大概の子供がアニマル子宮から生まれるようになれば、男/女の区別はますます意味がなくなる。女性は、卵の提供者であるかもしれないが、それは、男性が精子の提供者であるのと、あまり変わらないことになる。それでも、育児は女の役目、みたいな性別分業は、まだしばらくの間残るかもしれない。それからやがて、古い世代の慣習として、次第に忘れられていく。

【9】第三の影響は、避妊の徹底である。

アニマル子宮の技術が完成すれば、卵はすべて受精の瞬間から、新生児にまで発生できる(つまり「人間」である)ことになる。当然、中絶の正当化はむずかしくなる。だから何としても、意図せざる受精↓着床を避けなければならない。男性側の簡便で確実な避妊法が発見されるか、さもなければ、卵管を閉じてしまうタイプの女性の側の避妊か。卵巣から直接卵を採取するのだから、卵管は必要ない。第四に、子供をもうけることが、いま以上に慎重な考慮・選択の結果となる。

子供をもうけて、一人前に育てるには、将来ますます多くのコストがかかるようになる。それを夫婦(女性)が決意するのは、経済的にも、精神的にも、子供をむかえる準備がととのった、と判断する場合だろう。そうした規準をクリアすることが、社会的にも要請

かないというような、ガックリした人口の落ち込みがありうると思うのである。

このシナリオを、つぎに検討してみよう。

### 3 人間と機械の共生する社会

【11】炭酸ガスの排出規制といった問題が、ここ数年ようやく、先進各国の間で重要な問題になりはじめた。二一世紀は、経済成長と環境容量との相剋がどんどん尖鋭になる一世紀になるだろう。「成長」に限界があるのは明らかである。個々の排出物なら分解したり処分したりすることもできよう。それにもエネルギーはかかる。あらゆる経済活動の最終的な排出物——廃熱——は、分解も処分もできないで、環境中に放出するしかない。大気は保温効果があるから、じわじわ地球の温度が上がっていくだろう。

世界のあちこちに住む人びとは、その土地々々の気候をいわば既得権として享受している。だから、温度上昇はえらい迷惑だ。そこで、温度の上限⇨経済活動のレベルの上限が定められる。軍縮ならぬ、熱縮である。こうして限られたパイを奪いあう、先進国と発展途上国との深刻な闘争(ゼロサム・ゲーム)が開始される。

こういう状態のもとでは、人口減少への強い誘因が生じるだろう。発展途上国に追い上げられ、熱量割当てを毎年少しずつ譲り渡していかねばならない先進国では、ことにそうである。利用できる資源が一定なら、より豊かに生活するには、人間の数を減らす以外

される。「気がついたら妊娠していたので、子供を産みました」なんという言い方はできなくて、みんな親の責任、大人の責任になる。

悪魔的なSF小説によくあるのは、人工子宮を並べた工場で、ロボットのよう人間がどんどん「生産」されていく、というストーリーだった。たしかに、アニマル子宮の技術を使えば、それに近いことも可能になる。しかし、人間は生まれつばなしでなく、その後長い養育の期間を要する。それを提供するのには、(少なくとも自分のあいだ)家庭(ないし、それに準じた小集団)以外にないのだ。人間がポコポコ工場で生まれる、というイメージとは反対に、出産革命のあと、子供の出生数が減少する傾向は、少なくとも先進諸国での根強い傾向になる。

【10】しかし、出生数や家庭のあり方が、この先どういふふうに変化していくかを、出産技術の変容だけから追いかけるのは無理である。それ以外のさまざまな要因も考慮しないと、予測はむずかしい。たとえば、老化研究の進みぐあい(人間は何歳まで生きようになるのか)。先進国/第三世界の経済格差(ことに労働移動がどこまで進むか)。高齢化社会の労働力問題(労働力のロボット代替はどこまで進むか)。地球環境問題(産業社会は環境容量をどこまで克服できるか)……。

これらの問題はいずれ、われわれの社会を悩ませる。これらが、どういふ順番であらわれ、どう解決されるかによって、未来のシナリオは相当違ったものになってくる。

ここでひとつだけ、考えてみたいのは、出産革命からまたしばらくして、人類が極端に人間を産まなくなる可能性(人口大減少時代の到来だ。たとえば、前の時代に比して次の世代が、十分の一の人口し

ないからである。

【12】人口の減少は、「過疎」と呼ばれ、困った現象と考えられてきた。既存の産業・通信・運輸の水準と密度を維持できないまでに、人間の数が減少してしまうからである。だから、人間の数が減っても、産業・通信・運輸の水準が低下しないですめば、必ずしも人口の減少を避けるべきだということにはならない。後述するように、そういう条件が、二一世紀の先進諸国には整っているはずだ。

出生数の減少を人びとが好ましく思うようになる理由のひとつとして、高齢人口の急速な増大を考えてみてよい。ガンや心臓病のような死因の上位にならぶ病気が、治ったり予防できたりするようになる、人間は寿命いっぱい生きられるようになる。しかし、寿命とは何だろう。人間はなぜ、大抵の場合、八〇歳、九〇歳になると死んでしまうのか。それはよくわかっていない。細胞レベルで老化が進むからだろうか、そのメカニズムが不明なのである。

それが解明できれば、人間の老化をくい止める(大幅に遅れさせる)ことが可能になる。この技術は、爆発的な需要を生む。キリスト教では、人間が死ぬのは何かの間違ひという発想なので(クリスチャン・サイエンスを見よ)、特にアメリカなどでは、あと百年でも生きたいという人びとが大勢あらわれるだろう。しかも、よほどよほどともなく、生きながらえるのでなく、若いまま年を重ねていくということなら、日本人だって長く生きたいと思うはずだ。

というわけで、かりに寿命が二倍に伸びるとしたら、よほど出生数を減らさないと、つじつまが合わなくなる。現在生きている人を、まさか殺す(長生きできる技術をあなたに使えません、と拒否する)わけ



にはいかならないから、まだ存在しない人間、これから生まれる人間で調整する以外にないわけだ。

【13】寿命の劇的な伸び(老年革命)は、高齢人口の急速な増大と、人口圧をもたらす。ほおっておけば、相対的に若い人びとに、大きすぎる負担がかぶさってくる。

これを切り抜ける決め手は、ロボット化につきる。人間が自分の手で、ほかの人間の生活を支える構造(老人介護とか、サーヴィス提供とか)をなくして、そのかわりに、機械が人間の生活を支えるシステム(ロボット化)を押し進めるのだ。

サーヴィスが、ほかの商品と違うのは、その場その時でしか享受できないことである。この性質は、サーヴィスの与え手が、サーヴィスを受ける人間(顧客)の個性(嗜好や、病状や、注文や、……)を認知し、それに合わせて、あるいは顧客の指示(口頭言語による命令)に応じて、すぐ適切に反応することを言っている。この種のサーヴィスは、人間にしかできなかった。けれどもまもなく、機械にもそれができるようになるだろう。状況意味論などの試みがうまくいけば、人間が適当に命令するだけで、状況に応じて適切に反応してくれる機械が実用化するはずだ。

サーヴィス労働がすっかり人間の手をはなれ、機械化するということは、人間がひとりのこらず機械のサーヴィスの享受者となる、ということでもある。人間は、日常生活においても、そのほかの場面においても、機械のシステムにサポートされて、行動する。高齢者や病人、障害者が、誰かのサーヴィスを必要とする場合、機械がそれを提供する。ましてふつうの人間に対するサーヴィスを提供す

ることなど、こういう機械には朝飯前のはずだ。

【14】機械にサポートされないと、人間が社会の単位になれない社会を、「人間と機械の共生社会」とよぼう。機械は人間のために存在する、しかし、人間も機械がなければ、生きていけない。ゆえに、両者は、共生の関係にある。

このことで、社会の性質は大きく変化するだろう。

まず、機械は、人間とちがって、出産のような社会関係に縛られておらず、産業システムのなかで生産される。故障したり古くなったりしたものは、廃棄できるし、新しい設計思想にもつくものを、たちまち普及させることもできる。人間—人間—人間……という連鎖が、社会であった。それが、人間—機械—人間—機械……という連鎖に置き替わること、社会の変化は加速する。人間を規制する制度(種の慣習)よりも、機械を規制する技術のほうが、容易に変化するからである。

この変化は、おしとどめられるだろうか。

まず、人間と機械の共生社会への移行だが、これは人道的な緊急課題でさえある。病氣や障害で苦しむ人びとや、高齢のため自分の生活を独力で維持できない人びとは、こういう技術に大きな利益を見出す。機械のサポートがあつてこそ、彼らは社会の一員として、ほかの人びとと対等に生きていける、と言つてもいい。さもなければ介護に縛りつけられる人びとを、そこから解放することにもなるこの技術は、したがって、福祉の切り札にほかならない。だがこの機械の普及を、おしとどめられるだろう。

【15】ところで、同じこの技術が、健康者にとつても測りしれない利

益をもたらすことになる。機械が家庭に入りこみ、日常のこまごまとした家事一切を機械に任せることができるようになれば(ホーム・オートメーション)、家族を含めた人間関係のあり方も、大きく変化する。家事ロボットなどの機械を、人間が標準装備し、人間が機械に依存する割合が高まれば、その分、人間に依存する割合が低くなる。年代別の人口構成がバランスを欠いたものになつても、出生数が劇的に減少しても、大丈夫である。

家事ロボットなどと言うと、スターウォーズに出てきたようないわゆるロボット(人間の格好をして、金属でできていて、抑揚のない声でしゃべり……)をイメージしてしまうかもしれない。しかし、ここで考えているのは、さまざまなセンサーと学習機能をそなえた、知能機械としての家屋である。この機械は、人間(住人)の個性に適応しながら、家事を片づけ、健康管理し、……最期を看取るのである。【16】人口が極端に減少すると、社会の活気が失なわれる、と言われてきた。だが、今度に限って、そういうことはないだろう。

人間は、労働力の源泉、すなわち資源である。そして、消費の主体、つまり、経済システムを支える外部でもある。人口の減少は、資源の減少、そして、経済活動の水準の低下を意味した。そして、過疎、すなわち情報密度の希薄化を意味した。

人間と機械が共生する社会では、こうした前提がみな妥当しない。まず第一に、労働サーヴィスの提供は、人間から機械に代替されているのだから、人口が減少しても、「人手不足」のような影響を経済に与えない。第二に、消費はすでに、環境の壁によって総量が頭打ちになっているから、人口減少→一人当たりの消費増大が、むしろ

その高度化のためによい効果を持つ。第三に、人間の数が減る以上に、情報密度を高めていくことは十分可能だ。メディアがどんどん高度になつて、人間と人間の接触の頻度と質が高まれば、社会はいっそう刺激にみちたものになる。才能と才能が、異質なものと異質なものが出会うチャンスに、人間の創造的活動は依存している。人間が機会にサポートされる割合が高まるほど、そのチャンスも広がることができるようからである。

こうして、二一世紀、先進国ではとりわけ、人口が激減していくであろう。これは、ふたたび南北の不均衡を拡大する結果となろうが、必然的にたどられる経過だと思われる。

#### 参考文献

橋爪大三郎

一九七九「生命科学と女性の権利」「女性の社会問題研究報告」3:1-26

一九八六「来るべき機械主義」→「仏教の言説戦略」:251-264.勁草書房。

一九八九「性の未来都市」「都市」2:154-156.

一九九〇a「普遍性の模索日本は変わるか」「ブリタニカ国際年鑑1990」:562-565.

一九九〇b「性愛のポリティクス」『岩波・哲学の冒険』第4巻(近刊)。(はしづめ だいさぶろう・社会学)

編集部より 四月号に以下の訂正があります。

一八七頁上段六〜七行目 一九八九年十月→一九八七年十月